

三月終わりの、ある日のことだった。

風早の街の西にあるこの辺りは、道路沿いにも公園にも桜が多く、そこここに咲き乱れていた。戦後、慰霊のために植えられてきたというその苗木が、七十年を経たいま、見事に咲き誇り、花びらが風に流れていた。百貨店の周囲の歩道にも桜の花びらは散り敷かれ、一階の正面玄関はもちろん、そこからはいくらか距離があるエレベーターの中にまで、どうかすると花びらが舞い込むような、そんな日のことだった。

星野百貨店のエレベーターガール、松浦いさなは、その日も自らが乗る美しい箱を操っていた。

この百貨店のお客様用のエレベーターは、三基ともすべて手動式で、いさなたちエレベーターガールが操作する。この百貨店が平和西商店街に建った、五十年前（そう、今年はこの店にとって、記念すべき節目の年なのだった）のその日から稼働しているという、旧式の機械で、つまりはデザインも当時のまま。古くさいというひともいると知ってはいたけれど、美しいなあといさなはいつも思っていた。薄い金色の扉にも内部のあちらこちらにも、見上げれば小さなシャンデリアにも、こ

の百貨店の花、象徴とされている野の朝顔の意匠の飾りがあり、アルファベットのHをあしらった百貨店のマークが描かれている。見る度にいつも綺麗なマークだと思う。

エレベーターはゆるやかに上昇し、また下降する。このかごは二基並んで動いている本館のエレベーターのうちの二号機となる。三基目のエレベーターは別館で動いていた。

いさなは今日は遅番で、途中休憩を数回はさみつつ、八時の閉店時刻まで、この二号機をメインで操ることになっていた。いさなはこの仕事がたいそう好きで、一日中だってエレベーターの操作ができそうに思うけれど、いわばこの道のプロであるエレベーターガールも、乗っているのと酔ってしまうのだ。体育会系でがっしりした体つきをしていて、子どもの頃から体力には自信があるいさなだって例外ではないのだった。実際、一度、体調が悪いときに、ひどく酔ったことがある。そのとき、九州は長崎の海育ちのいさなは、子どもの頃、海で遊びすぎたときの酔いを思いだした。一瞬暗くなった視界の中に、海の中から見上げた、空の光のかけら

が見えた。

（一日、空を泳いでいるようなものだものね）

ここ星野百貨店のエレベーターは、その三方がガラスとアクリルの板でできたシースルーエレベーター。地下一階から屋上八階まで吹き抜けになっているフロアの奥の、ガラス張りの壁に沿って上下する。店内を浮遊するように、ゆっくりと上下運動を繰り返す。

扉についた細長い窓越しに見下ろし、また見上げる店内、その中央には、見事なダブルクロスエスカレーターが、これも一日、規則正しくベルトを動かしている。豪華なシャンデリアと吹き抜けの窓から降りそそぐ日差しを受けて、エスカレーターはとても華やかに、美しく見える。悲しいかな、消費が冷え込んで、百貨店業界が斜陽の時代のいまでは、お客様もずいぶんゆとりをもって乗るようになっていて、少しばかり大げさすぎる、豪華すぎるエスカレーターに見えないこともない。

エレベーターは、店の外に向けて設置されている、大きなガラス張りの壁を移動するので、いさなの仕事は、この風早の街の景色の中を、日に何度も上昇し、下降することでもあった。

季節ごと、時間の経過につれて移り変わって行く街の情景――。レバーを操る合間に、窓の外を振りかえるたびに、空も街もなんて美しいのだろうと、飽きずに何回も思うのだった。

（空を泳いでいるみたい）

いまの季節、空の水色と雲の白、桜の花の薄桃色の波の中を透明な箱は上下する。自分が、日に何度もこの街の空に飛び込み、浮上する生き物になったような、そんな空想をひそかに楽しむときもあった。空を泳ぐ大きな魚になったように。